

〈論文〉

西田幾多郎臨終記

鈴木 亮三^{*1} 山本 紘一郎^{*2} 小比賀 美香子^{*3}

はじめに

西田幾多郎（1870-1945）は、1944 年 10 月 23 日に岩波書店編集者の布川角左衛門（1901-1996）に宛てた書簡のなかで、「ヘーゲルの Jena でナポレオン軍の銃声を聞きながら現象学を書いたといふ心持ちにて 出版の事は何とか御努力願ひます」と記し、論文「生命」から「場所的論理と宗教的世界観」へと書きつないでいた¹。この書簡を送った翌 45 年の 2 月には、長女の上田弥生（1896-1945）が急逝する。その後、郷里の石川への疎開の話があり、後に弟子の務台理作（1890-1974）・下村寅太郎（1902-1995）の手引きなどによって、彼らの東京文理大学の疎開先でもあった信州は飯島村（現在の上伊那郡飯島町）への移動の計画が持ち上がった。戦中に雑誌『思想』に西田とともに論文を掲載していた田中美知太郎は、西田の疎開の経緯について記したあとで、当時の状況を次のように回想している。

戦局は今や絶望的となり、わたしたちは天下国家をどうすることも出来ず、しかも政府や軍隊を頼りにすることも出来ないところにおかれたわけで、めいめいが一身一家のことを心配しなければならないことになったのだ²。

田中は、疎開だけでなく、前後するが、六女梅子（1909-没年不詳、前妻寿美〈1875-1925〉との子）の夫金子武蔵（1905-87）の兵役についての立ち回りについても西田の「心配」として書き加えている。西田は「逡巡」の末、ついに下村に疎開を決断する書簡をしたためた。1945 年 5 月 30 日のことであつた³。しかし、翌日の 6 月 1 日午後、現在も残されている鎌倉の姥ヶ谷の家屋で倒れ、周囲の見立てと異なり、7 日に帰らぬ人となった。大戦も末期とは

^{*1} 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科

^{*2} 岡山大学病院 総合内科・総合診療科

^{*3} 岡山大学学術研究院医歯薬学域 総合内科学

いえ先の見えぬ中でのことである。西田の臨終について、死後に公刊された多くの評伝では、西田の絶筆「私の論理について」⁴のエピソードとからめて記録される。例えば、近年のものには次のような描写がある。

しかしこの原稿が書きあげられることはなかった。六月一日も午前中までその執筆を続けたが、昼食後にけいれんを起こし、昏睡状態に陥った。文字どおりこれが絶筆となった。……尿毒症であろうという診断であった。いったん意識がもどったが、六日にふたたび昏睡状態に陥り、翌朝四時に死去した⁵。

「昏睡」がどのような状態であったか、「いったん意識がもどった」とはいつのどのような状態を指すのか、周囲はその一連の経過をどのように受け止めていたか、などはもちろん省略される⁶。確かにそれは評伝としては余計で些細なことである。しかし、この西田の臨終に関して、いくつかの詳しい記録があって、それぞれの視点で書かれたそれらを拾い集めてみると、それぞれに内容が微妙に異なっているように見えるとしたらどうであろうか。

間近で西田に常に付き添っていたのは、妻の琴（1883-1973）と梅子2人であり、彼女たちが周囲に語りそれを西田の弟子たちが記録したものが、後の評伝の原資料になったと推測できる。琴の話した内容については、西田の葬儀の直後に木村素衛（1895-1946）が克明に記録している。さらに、次男外彦（1901-1949）、佐藤信衛（1905-1989）らもこの時期に西田邸に出入りした記録を残している。これらに、木村とともに葬儀に駆け付けた高坂正顕（1900-69）、西田の孫上田久の評伝をも加えて、日ごとに分けてあらためて時系列に並べ直すと、琴（あるいは木村）の記憶の欠落の可能性などがあることも分かる。そこで、本稿では、西田の臨終の記録をあらためて校合・再構成することを試みる。

1. 西田の病歴と臨終の記録資料の状況

西田の家族の病歴については、あらためて紹介するまでも無いであろう。ここでは、西田その人のものとしては、37-38歳の時に「乾性肋膜炎」の発症と再発があったと記録されている。晩年の病歴については、孫の上田久作成の年譜によれば⁷、1941年10月初旬より「リュウマチス」になり、10ヶ月仰臥し、執筆もできないほどであった。文字を書くことさえ不自由になったことも書簡に記されている。この時期に指の運動のために握ったゴム人形は、石

川県西田幾多郎記念哲学館に保存されている。一時は京都府立病院に入院していた。この病をえた際に最初に診察にあたったのが、臨終の記録にも顔を出す「主治医」武見太郎（1904-1983）である。彼は、岩波茂雄（1881-1946）、幸田露伴（1867-1946）ら多くの著名人を診たことで知られている。同年10月8日の日記には、「午後武見へ診察をうけにゆく。糖尿の気味ありという。血圧は170-160。」と記し、翌年の日記には、天候の記録と、9月末までは2～3日おきに「マッサージ」の文字が並ぶ。若かりし西田が「打坐」と毎日のように記したことはよく知られているが、それに似たものを思い起こさせる。

逝去の4ヶ月前の1945年2月11日（木）の日記に、「陰鬱、寒。夜少雨。金子来訪、宿、話分る。」と書き、その翌々日より、同年の6月1日の最後の日記に至るまで、天候と朝昼の気温を記録し続けた。西田は体調の変化を気候と関連づけていたことが窺える。実際、同月25日には、「0°8° 少々腹の具合わるし、寒気の所為か。」とある。また、21日の日記に、「小林より武見の診断書。」とある。診断書を携えて来たのは茂雄の娘婿の小林勇（1903-1981）であろうと思われる。その他、週に一度程度の入浴の記録と、来訪者、戦況の記録が続く。

問題の6月1日以降に関して、参照する文献は、おおよその記録された順で並べると、以下の通りである。木村素衛『花と死と運命 日記抄』（「昭和二十年六月十七日」の日記。木村素衛先生日記抄刊行会、1966年、260-262頁。）、西田外彦「跋」：西田幾多郎『哲学論文集 第七』（末尾に「昭和二十年十一月二十五日」という日付がある。旧全集第11巻、1979年、465-468頁。）、佐藤信衛『西田幾多郎と三木清』（「あとがき」に「昭和二十一年秋」とある。中央公論社、1947年、161-165頁。）、高坂正顕『西田幾多郎先生の生涯と思想』（「序文」に「昭和二十二年初秋」とある。弘文堂、1947年。引用に際しては、理想社版著作集 第8巻、1965年、232-233頁。）、上田久『続 祖父西田幾多郎』（南窓社、1983年、269-270頁。）の5つの記録である。

最も詳しいのは木村素衛の記録である。6月9日の火葬の後、西田邸に上がり、「遺骨の室」で「唯一人沈んで思い込まれた顔をして籐椅子にかがみ乍ら倚っておられた」琴から「はじめて……先生の有様を聞いた」内容を、日記で再現しているからである。西田の次男外彦のものは最も短い、6月3日についてのみであっても自身の目で見たと記録であり、親族自身の手による唯一のものとして貴重である。

佐藤信衛は、西田と同じ姥ヶ谷の住人であり、しばしば西田のもとを訪れていた人物である⁸。おそらく琴と梅子の次に西田の様子をよく観ていた人間である⁹。高坂正顕による文章は、戦後の無数の評伝のひとつの典型であると言ってよいものである。木村の日記にあるように、

高坂は木村、西田の三女静子(1905-1976)とともに、出棺にぎりぎり間に合った人物であり、木村と同じ様に琴から詳細を聞いたかもしれないが、その記述は、西田の死後2年が経過した時点のものである¹⁰。これらに、上田久(1923-不詳)による再構成の記録を加えることができる。西田の長女彌生(1896-1945)の次男である上田は、主に木村の聞き書き等を用いて西田の没後30年以上後に記した。しかし、親族の証言をいくつか追加記録している点で、見過ごせないものとなっている。これで、直接最期の西田を見た人物の証言、ちかしいがゆえに他では知りえない情報を盛り込むことのできた人物の記録としては、尽くされているように思われる。

以下では、木村による5月末の記録をはじめとする、6月1日(西田の最後の日記を含む)から7日未明までの日ごとの記述を、それぞれの資料から採録し時系列に再編した。必要なかぎりでは下線を引いた部分は、他の資料にない証言である。資料については、漢数字はそのままにし、現代仮名遣いに変更している。〔 〕〈 〉内は本稿筆者による捕捉である。なお、日記の引用には日付のみ記した。

2. 時系列の記録

・5月末

【木村素衛】

先月二十六日、二十七日、書を書かれた。九鬼さんのお墓の字によほど苦心されたという。大変疲労された。二十八日も疲労が続き、身体中痛み、奥様がケンビキや三里に灸をされた。三十日にはそれでも下の有島家を訪ねられたが顔色は悪かったと云う。

【高坂正顕】

先生は新しい仕事にとりかかる前に、依頼された揮毫を果たされるのが常であった。倒れられる前日であったが、先生はかなりに多くの書を書かれた。特に故九鬼周造博士の墓標の字は限られた枠に一定の字をはめるためか、随分苦心されたそうである。とくに大患以来左手が不自由な先生は余程疲れられたに違いない。その日の散歩の途次、先生が立ち寄られた有島氏の夫人は先生の顔色のすぐれられないのを案じられたという。しかし翌日は、既に新しい論文にとりかかられた。

【上田久】

祖父は二十六日、七日と頼まれた書を書いて大変疲れた。それでも三十日には姥ヶ谷の海岸

の有島生馬邸を訪ねたが、顔色は悪かったという。

・6月1日

【西田幾多郎】 ウス曇 20°

【木村素衛】

六月一日、午前執筆された。これが絶筆になったもので「私の論理について」と云う。奥さんに二階に上って見せて頂いたら五枚のもので恐らく書き出された一日分である。前後五枚の字は行が左へ横なりに少し曲っていた¹⁾。

十一時頃、二階から下りて来られて、脚がふらふらすると云われ、廊下さえ歩みにくい有様であった。一体に食慾はずっと近頃よく、魚類や野菜など好まれたが、唯奥様が不思議に思はれた事が二つあった。それは最近のことらしいが一度は向かい逢って食べているとき奥様のグリンピースに箸を向けられた。御自分のが前にあると注意されて初めてそれに気づかれ、今一度は食後にパンを焼いて上げたのを奥さんの召し上がるのを見ていて俺にはくれないのかと云われた。やはり御自分の前に在るのが見えなかったらしい。一日の日は正午のラジオも開けてあったのに耳にも入らなかったのか、ラジオはどうしたのかとあとで聞かれたと云う。食後台所にいると一時近く先生が呼ばれた。こたつの切ってある室である。仰臥して頭が痛いと云われる。近頃同居の梅子さんが頭を冷やしそこに床を引いて安臥させられた。間もなく睡られた様子で奥様は台所へ去られた。直ぐまた呼ばれる。吐気らしいと思って行かれたら果たしてそうで食べたものを皆出してしまった。直ぐ痙攣が来た。梅子さんは下の家〔有島邸〕へ電話をかりて医師を呼びに行ったが医師は来られない。岩波氏へ電話をかけると痙攣は終わって昏睡状態。そのうち岩波さんも医師が無いと云って空手で来る。町会長へ岩波さんが頼みに行く。その前に近所に焼け出されて東京から来た医者があり、平賀と云う軍医で、軽い脳溢血ならんと診断する。明日帝大又は陸軍病院から医師をよこすと云って去る。町会長は本間さんというお医者連れて来る。脳溢血が尿毒症か不明と云う。いびきが余り高くなく、時々呼吸に尿毒症らしきものありと云う。

【佐藤信衛】

昭和二十年六月一日夜西田先生は鎌倉姥谷の別荘の居間の畳の上に卒倒された。間もなく意識は回復して、そのまま床に就いておられた。脳溢血の軽い発作であった。二日後金子君が来て私はそれを知った。

【高坂正顕】

五枚目の原稿の字には少し行の乱れが見られる。先生はおそらく不快をおして仕事をされたのであろう。午の食事の時、奥様は、先生がおかしなことをなさると思われたという。それは先生が御自分の前におかれた豆の皿を越えて奥様の分に箸をつけ、奥様に注意されて初めて気がつかれたそうであろう。無論奥様はそれ以上のことを案ぜられはしなかったであろう。途中、奥様が台所に立たれた後、先生は突然倒れられたのである。当時のことで、岩波さんの配慮があったにも拘わらず、仲々医者も来てくれない。随分奥様は心配されたことであろう。

【上田久】

一日の午前まで論文を執筆していたが、十一時頃階下へ降り、食後しばらくで痙攣が起り、昏睡状態になった。生憎戦時中で容易に医者が見つからず、虎の門の本間氏が来られ尿毒症らしいと診断された。祖父はそれまで身体の異常を訴えることはなかったが、祖母は「いまから考えると、その前に二度おかしなことがあった。目の前にあるパンやグリーンピースを気づかず、私のものをほしがったという。また同居していた民子たちの話では、倒れる数日前、庭で祖父は転んだという。

・6月2日

【木村素衛】

翌二日長谷の病院にて検尿、蛋白少し。本間氏は絶対安静を命ずる。

【高坂正顕】

幸い、翌日には先生は既に意識をとりもどされ、……

・6月3日

【木村素衛】

三日、武見太郎氏来診、以前のリュウマチの時の医者。ていねいに診る。血圧従来より甚だ高し。武見氏は一時的のもので、疲労が原因ならんと云う。脳溢血に似たものなるべしと云う。平賀氏は併し一二ヶ月は養生を要すると云う。オモ湯、野菜スープ。牛乳など摂る。割合に食欲なし。

【西田外彦】

六月三日の事である。父の様子が悪いから鎌倉へ直ぐに来てほしいと云って来たのは。電車の都合がつかず、夜遅くなって姥ヶ谷の家に着いた。父はいつも皆が食事をしたり、のんびり雑談したりする六畳の部屋で、蒲団の上に臥っていた。而して身体が痛むとしきりに母に

さすらせていた。目がショボショボして力なく、視力の減退を思わせたが、両腕を動かしてはと云ったら動かして見せた。別に左右均衡を失った様子もなかったので、軽い脳溢血位にしか考えなかった。それでしばらく絶対安静にすれば、回復もさして遠くないと思っていた。

〔3日の〕一夜看護って

【佐藤信衛】

三日夕お見舞した。わざと病間へは通らず外に立って病状をお尋ねした。主治医の診察もあり、安心しておられた。安静を保っているが、看護の家人と話もするようになり、日ならず本復しようとのことであつた。先年のことも思い私は益々安心した。沖縄の攻防戦が酣〔たけなわ〕で、那覇市が砲火に包まれた頃であつた〔沖縄戦は1944年3月下旬から8月まで。〕。／私はまた日々書斎に閉じ籠って暮らした。御病気のことは殆ど掛念しなかつた。前隣の有島生馬氏も散歩の折など見舞っておられ、私たちは長病とは思つても何となく安心していた。

【高坂正顕】

二三日後には、ラジオのニュースを聞くことを求められる程になられた。破局に瀕しつつある日本の運命が、あくまでも先生の念頭にあつたからに違いない。在る医者は軽い尿毒症と診断し、また一人の医者は軽い脳溢血と診断した。いずれにしても数ヶ月もすれば先生は回復されると考えていたのであろう。

【上田久】

三日には武見太郎が来訪して診察し、祖母に「脳溢血に似たもので、疲労が原因の一時的なものだろう。後で適当な医者をよこすから」と言つて歸られた。祖母は武見の言葉を信じて医師の来訪を待ったが、戦時下適当な人が得られなかつたか、待ち人はなかなか現れず、

・6月4・5日

【西田外彦】

〔4日に外彦は〕荻窪へ歸つて来た。

【高坂正顕】

東京から馳せつけて来ていられた外彦氏も、四日には帰京された。

・6月6日

【木村素衛】

六日に至り、オモ湯に米を少し混ぜてくれと先生が注文された。一日の昏睡は三時頃に治り、

その後は何でも語られた。奥さんは朝苺の汁を進められたところ大変おいしがられたがもうないので、昼は大根の汁でもと、畑へ取りに行かれると、先生が直ぐ呼ばれる。なだめて置いて、大根汁を作り進められたらこれも喜んでのまれる。午後手紙の返事のさし図をされた。夕方ラジオを聞くと云はれるので、或は却って疲労の原因にならむかと、奥さん低音でかけられる。聞き終って十分程したら後頭部が痛み出された。それ迄は右の頭痛と右の肩こり。それには塗り薬などを奥さんがされると、暫らくは気持ちがよかったと云う。然るに、この日は後頭下部が非常に痛く、堪え難く痛いと言へられる。顔に油汗が出た。瀉腸を望まれたので瀉腸をされた。医者と呼ぶ間に、いびきが始まった。昏睡状態に陥られる。色々な人が医師に奔走されたが結局本間氏東京より帰つて診察され注射を打った。

【佐藤信衛】

六月六日夜八時頃金子夫人〔梅子〕が見え、とつぜん容子〔ママ〕が変り苦しみがひどいことを言われた。あいにく鎌倉に掛りつけの医師がなかった。それに乗物の不便な姥谷へ夜分往診する医師はないらしかった。私も困って前の有島家へ行き、奥さんの心当りも訊いていただいた。電話で八方当たってみたがむだだった。病状を言ってみると安静の外には手当の方法もないとのことだった。里見弴氏も心配して下さった。十時近くともかく有島夫人と先生のお宅へ行った。海寄りに南西の風の吹く暗夜に女中が蔽〔おおい〕をして持つ提灯の心細い光を便りに谷戸の坂道を上って行った。／玄関の次のふだん居間になっていた六畳に仰臥して睡っておられた。電灯の明るい光が真上から先生の顔を照らしていた。枕許には奥さんと金子婦人が座っているだけであった。激しい苦悶の後に間もなく意識を失い昏睡の状態になったとのことであった。電灯の明るいのと奥さんの話の声高なのを気にしながら、私は息を凝らして寝顔を窺っていた。疎らな髪や髭は伸びていたが、艶のある赤味さへ帯びた顔は垂死の人とは見えなかった。静かに寝息が聞こえていたが、それも数分とは続かず、忽ち鼾のような溜息のような深大息をした。それも直ぐ止んでまた静かになった。これが交互に反復した。先年の発作にこのようなことがあったかお訊ねしたが、ないとのことであった。電灯の光も枕許の話声も先生の眠には何の障にもならなかった。これはもう先生ではないと思った。／十時半頃岩波〔茂雄〕氏が医師を連れて見えた。たまたまこの近所に疎開してきていた人であった。私は暗い廊下へ出て、意識のない先生の肉体を容赦なく動かす医師の手許を見ていた。私の詮索心も強く起こった。かかる著しい状態の原因が分からぬ筈はないと思った。解剖にも診察にも経験のないことを故もなく恥ずかしく思った。／診察の結果は尿毒症かとのことであった。そしてごく軽く見ていた。やがて覚醒しようとのことだった。あまり

軽い診断は私には絶望と言われたのと同じな気がした。医師が帰るのを送って皆引き取る
ことになった。私は強いて不安を打ち消した。昨日までの安心な気持ちを思い起こしそれに縋
ろうとした。

【西田外彦】

母の話によれば、六日夜から容態が急変して

【高坂正顕】

しかし六日に至って容態は再び急変された。

【上田久】

そのうち六日の午後になって容態が急変し、後頭部に痛みを訴え、再び昏睡状態となり、東
京から帰った本間氏が来診されたが、

・6月7日

【木村素衛】

七日朝三時頃、奥様少しまどろまれたら、異様な音を聞いて目をさまされた。痰のからみで
ぜいぜい云っておられたのであった。口を少し開いていられたので、ピンセットにガーゼを
はさんで痰を取られる。沢山出たらしい。／奥様隣室の梅子さんを起す。四時頃長く呼吸し
て終られた。長々と話し終って奥さんは門下生に逢えず寂しく死んで行かれた事をひどくい
たんでおられた。

【佐藤信衛】

翌朝は早く目ざめながら起き上がれず六時頃まだ床にいと、勝手口に誰やら人の声が出て
女中と話すのが聞えた。昏睡のまま明方の四時頃息を引き取られたとのことであった。始め
て私は先生は亡くなられたと思った。急に不安が心を押しつけて、しばらく床の上に仰臥し
たままでいた。平常を乱す事件が起る度に味わう気持ちである。それほど先生は姥谷の永い
住人であった。

【西田外彦】

遂に七日午前四時頃、母に抱かれて七十六年の生涯を閉じたのである。病名は尿毒症であっ
た。

【高坂正顕】

そして先生は七日早朝、ただ奥様と疎開していた梅子さん（金子武蔵夫人）たちだけに見守
られつつ、静かに永眠されたのである。

【上田久】

七日早朝四時、祖母と梅子とに看取られて尿毒症で息を引き取った。七十六歳であった。

以上が、記録のすべてである。

3. 記録間の食い違いや不明点などについて

5月末について。西田の日記には、書についての記録はあるが、それによる疲労の記録も、有島家への訪問の記録もない。健康についての記録としては、27日に、「けふは始めて夏らしい。又字をかく。島谷印刷着手の手紙。湯タンポやめ。」とあり、翌28日に最後の「入浴」の文字を確認できる。印刷とは、生前に刊行されることのなかった「場所的論理と宗教的世界観」（戦後『哲学論文集 第七』に収載）のことである。上田による「顔色が悪かった」という証言は、高坂によれば、有島生馬の妻の言で、上田自身の注記によれば、有島の長女暁子（1911-1982）のものである。書の作成と絶筆となる文章を書き始めた日付について、高坂は誤っている。

6月1日について。木村の記述が正しければ、佐藤の言う「畳の上に卒倒」は誤りである。西田は、痙攣を起こす前に、何等かのものを昼食として口に入れており、木村によれば、「食べたものを皆出して」った。この時点で、「脳溢血」か「尿毒症」かは、確かではなかったことも木村の記録からわかる。「グリニピースとパン」について、目の前ではなく、妻琴の前のものを欲しがった、という記述についても混乱がある。これが1日のものなのか、それ以前のものなのかは、判然としない。上田（および高坂）は、それを1日の出来事として記している。これをもって何等かの兆候と言うことができ、木村が正しいのなら、異変は、6月1日より前に生じていたことになるが、確定的なことは言えない。

6月2日について。意識を取り戻したにも拘わらず、この日の記録はほとんど残っていない。西田は、1941年10月に「リュウマチス」と診断された際の検診で、すでに、糖尿の気味を指摘されていた。だから、2日の検尿も、あまり周囲は気にしなかったのかもしれない。また、2日の記録は木村によるものだけであり、詳細は不明である。姥ヶ谷の家から数キロはなれた長谷の病院に、どのようにどのような状態で行くことが出来たかはわからない。本間氏の診断が同じ病院内で下されたのかどうかも不明である。ただ、意識を取り戻した後に、診察を受けたことだけは確かなようである。なお、木村の記録には、最後の6月7日の記録の

後に、「二日には外彦氏が幾久彦君〔外彦の長男。〈1928-不詳〉〕を連れて見舞に来られ一泊されたと云う。」¹²とあるので、日にちの記録については、木村にもある程度混乱があったことが窺える。

6月3日について。周囲の人間が「様子が悪い」と認識したのは、西田が倒れてから2日後のことである。しかし、武見、平賀、本間の3名の医師が診ても、「疲労ゆえの脳溢血のようなもの」「尿毒症」など、診断は一定せず、病状を軽く見積もっていることが分かる。それでも、2日には昏睡から醒め、翌3日は、声を出し、痛みを訴えるほどにまでなっていたこともあったか、周囲の人間には想像以上に切迫した感覚がみられない。武見の約束した医師も来なかったようである。高坂の「医者診断」に関する記録は、3日と6日のものが混ざっているようにも見える。ラジオを聞くことを求めた、という記載は、6日のことである可能性もある。

6月4・5日について。この4・5日の2日間の記録が外彦の「帰京」以外にないことがわかる。これには、本人が倒れては起きるのを繰り返していたこと、意識を取り戻した際に、発話ができ食事を口にするほどであったこと、医師も病状を軽く診ていたことなどが与っていたのかもしれない。

6月6日について。佐藤の記す「医師」は、既出の「本間」である。「注射」の内容は不明である。琴の回想と佐藤の記憶をあわせると、翌日の急変を誰も予想していなかったことがわかる。木村の「一日の昏睡は三時頃に治り」というのは判然としない記録である。実際には2日には覚醒していたはずだからである。それまでは「何でも語る」ほどにまで至っていなかった、ということ指しているのであろうか。食事は、この日が最後である。午後には手紙の指図までするほどに回復している。しかし、「後頭（下部）」の痛みを抑えるために「浣腸」を自ら望んだあとに、再び起きることはなかった。「容態の急変」の正確な時間については確定できず、単に「夕方」であって、夜8時より前としか言えない。「医師が来る前に」艀をかきながらふたたび目を閉じた、とあるのも何時のことかはわからない。なお、翌7日の死亡時刻も、「四時」と「四時頃」で揺れており、一定ではない。

4. 臨終に関する資料をもとにした医学的判断

今日の医学的知見からみて、この記録をどのように読むことができるであろうか。まず病歴からみることにしよう。1941年に、西田は慢性関節リウマチと診断され、糖尿病（現在の

診断基準を満たすかは不明)と高血圧にも罹患していたようである。慢性関節リウマチの症状は天候と関連するため、天候の記録をつけていたと考えられる。当時の、慢性関節リウマチ(糖尿病と高血圧も同様)の治療がどのようなものであったかは不明であるが、「マッサージ」(今日で言う、リハビリテーションか)を受けていたことも記録の通りである。5月末の記載に「身体中の痛み」とあるが、慢性関節リウマチによる多関節痛のことであろうか。なお、尿毒症は末期腎不全の結果として生じる症状である。慢性関節リウマチ、糖尿病、高血圧いずれも合併症として腎障害を来し得るが、晩年にこれらの合併症として腎障害を有していたかは不明である。

西田が倒れたとき、「疲労からくる軽い脳溢血」と診断されていたが、資料から西田は急性の経過で倦怠感・頭痛・嘔吐・痙攣・意識変容／障害・昏睡状態を呈していたと推察される。現代医学の観点からも、これらの症状は脳溢血／脳出血などの頭蓋内病変でも生じると考えられる。軽症の脳溢血と判断された背景には、昏睡は一時的で、両腕などの明らかな麻痺がなかったことがあると思われる。回復してからの発語にだれも違和感をもたなかったこと、食事を少なくではあっても自力で食べていたこと、「左右の均衡も失われていなかった」(三日の外彦の記録)ことも、脳溢血や尿毒症の経過に明らかに矛盾するとは言えない。

なお、疲労と脳溢血／脳出血発症の関連は明らかにはなっていない。関連した研究では、初発の脳卒中患者において脳卒中前疲労(pre-stroke fatigue)を有する場合に脳卒中後疲労(post-stroke fatigue)の発症と関連している可能性が示唆されている¹³。脳溢血／脳出血以外に、クモ膜下出血の可能性もある。高血圧、糖尿病だけでなく、慢性関節リウマチも、脳卒中の発症リスクが高いことが知られている。

診断において頻出する「尿毒症」は、末期腎不全の結果として生じる症状で、食思不振・吐き気・嘔吐・抹消神経障害・中枢神経障害(集中力の低下や無気力から痙攣・昏睡・死につながる場合もある)を特徴とする¹⁴。したがって、記録を見る限り、西田の経過と症状は、尿毒症という診断にも矛盾しない。尿毒症が死因になっている同時代の人間に、西田の弟子であり、戦後まもなく獄死した三木清、戸坂潤らがいることを明記しておく。このことは、当時の検査技術では、死因を正確に特定することは困難と想定されるため、病態が明瞭でない場合、死因を「尿毒症」とされやすかったことも与っているとも考えられるが、定かではない。

佐藤信衛が報告している西田の顔の赤らみについては、皮膚の血流増加が原因であるが、鑑別疾患は多岐に渡る。顔面紅潮は発熱・高体温・酒^{しゅ}さに伴いしばしば観察される一方で、クッシング症候群¹⁵、アナフィラキシーや褐色細胞腫¹⁶、自律神経障害や偏頭痛などの神経疾

患でも生じる。腎不全だと腎性貧血により顔色は白くなる可能性が考えられるが、頭痛の既往や脳溢血疑いは顔面の赤色変化に関連していた可能性が考えられるからである¹⁷。

6日に、後頭下部が痛み、家族に浣腸をしてもらい、その後に来た医師が注射をしたことになっている。注射はこのときどのようなものだったかについては、現在であれば鎮痛剤の点滴が検討されるであろう。しかし、当時に利用できた注射薬の種類は不明である。更なる解明のためには医学史などの専門家の助言が必要となるであろう。

後頭下部の痛みについては（「それ迄は右の頭病と右の肩こり」があった）、既往の偏頭痛／緊張性頭痛の増悪または、経過に意識障害を伴っていたことを考えると、細菌性髄膜炎の可能性も否定できない。周囲に結核感染症が多かったことを考えると、結核性髄膜炎も鑑別に挙げられるかもしれない。さらに、後頭部痛は、頭蓋内での再出血の可能性もある。その後の「いびき」は舌根沈下によるものと思われ、さらにその後の、大息と静かになるのを交互に反復した呼吸は、チェーン・ストークス呼吸と考えられる。脳溢血、尿毒症とも、その原因になりうるからである。

おわりに

一番ちかくで見ていた西田の妻琴の記憶語りが最も正確なものと思われたが、外彦、佐藤の回想とあわせて推移をうかがう方が、より正確になるように思われた。周囲の人間だけでなく、医師もまたやや楽観的であったことも読み取ることができる。ただし、最終的な死亡診断を下したのが誰であったかは、少なくとも今回参照できた記録にはない。

琴も、木村をはじめとした周囲の人間に全てを話したわけでもなく、彼らもまた必ずしもその全てを記憶し記録したわけではないであろう。西田に腕を動かすように促し、具合を見たことは、外彦ならではの記録であるし、医師の診察の仕方が乱暴であったという記憶などは、部外者の佐藤に独自の視点によるものでもあるだろう。

共通しているのは、西田自身の最後の発語が記録されていないことである。何かを所望した言葉、手紙の指示など、日常的であるがゆえに、周囲の印象に残らない言葉が最後のものだったかもしれない。これは、和辻哲郎（1886-1960）の臨終に際して、孫が声がけをすると「何か言った？大丈夫、大丈夫」との言葉を発したとして、妻照（1889-1977）が記録しているのとは対照的である¹⁸。ともあれ、こうした記録の校合と今日的な医学的知見とによって、当時の西田とその周囲の人々の機微への通路がいくらかでも整えられたかと思う。

最後に、西田の晩年の鎌倉での様子を活写した、小島威彦（1903-1996）と今道友信（1922-2012）の回想を以下に掲げておく。前者は西田が鎌倉に終の棲家を得た翌年の1934年9月3日についてのことと思われる¹⁹。後者は、西田が倒れる直前の1945年5月22日についてである²⁰。今道が呉茂一（1897-1977）に伴われその親戚として特高警察をくぐり抜けて面会した記録である。以下にあるように、この日に西田は哲学者のロゴスについてしきりに語っている。前日の日記には最後の読書記録となる「Sigwart〔おそらく *Logik*〕を読む」の文字がある——「宗教論」を終えて5月17日には「Volz, Eremiaを読む」と記されている——。今道らとの面会の8日後の30日に、西田は、『論理について』を始める。翌々日の6月1日午前まで推敲をしつつ書き進めた絶筆「私の論理について」が哲学的遺言となった。

やがて夏休みに入り、大磯の野中の別荘に行き、八月からは伊豆長岡の深尾の玄柳荘に行くことになっていた。そこへ西田幾多郎から、北鎌倉の仮住いより稲村ヶ崎の別荘へ引越したから、そこへやって来いという簡単な、三行の葉書が届けられた。その別荘は、先生の『善の研究』の印税ですべて取り計ったという話だった。何はともあれ、先生からの走り書きだったので、僕はすぐ飛んでいった。江之島電鉄が相変らず生垣すれすれに走ってゆく。昔ながらのなつかしい電車で、稲村ヶ崎で降りると海浜にむかって灰色のペンキ塗りの二階家が建っている。有島生馬の住居だ。それも僕にとってはなつかしい家だ。海水浴の帰りには風呂を使わしてもらったこともある。生馬夫人は西園寺公の秘書を務めている原田熊男男爵の妹で、フランス人かオランダ人の血が半分流れている美しく優しい夫人である。会った後はいつも温い余韻が残っていた。僕はこのペンキ塗りの洋館を見る度に塩屋のアッチャーソンの海の別荘を思い起こすが、塩屋では淡路島を目睫にして、左右の彼方には四国と紀州の山並が霞んでいた。しかしここでは右手に伊豆の岬が幾重にも涯しなく折り重なって霞んでいる。この相模の海も明石の灘も僕の生涯に消えることのない紺碧の彩を織りなしている。西田幾多郎をこの海に迎えたということだけで、僕には何か天から素晴らしい慶事が告知されてきたような気がしてならなかった。／海と直角に丘の方へ細い畦道が延びている。そこを数百メートル入ってゆくと、二室か三室の小さな平家に西田という表札がかかっている。玄関のガラスの入った格子を開くと、西田新夫人が現われた。ハワイ大学出身のクリスチャンの夫人だという噂を聞いていたが、地味な和服姿の、どこにも新婚の匂いなど微塵も感ぜられない、色の浅黒い角張った、いかにも確っかり者の夫人である。僕が西田門下生になった時には

先生はすでに夫人を亡くされ、僕と同年輩の京大数学科の令息と令嬢と、女子大出身のハウスキーパーの構成による大邸宅の暮しだった。令息の外彦は先生に似て小柄だったが、ハウスキーパーは背の伸びた大柄美人だった。その美女と外彦の結婚も、長女と東大哲学の金子武蔵との縁談も整って、先生は自由の身となって再婚されたという話だ。先生は昭和三年、僕の卒業と同時に退官し、直ちに北鎌倉の生活が始ったが、四年〔「八年」の誤記と思われる〕の春ようやくこの新居に落ちついた。僕は新夫人に挨拶を述べて、狭い廊下を通して一室先きの奥の書斎に通された。三室しかない住いだが、籐椅子の応接セットはイギリスのブルーと茶の花模様の本綿の座布団が敷いてある。六畳の間である。テーブルに聖書がおいてある。腰をおろすと、すぐ先生は「聖書をあらためて読み出したよ」という。新夫人の影響だろうと僕は愉快だった。「先生は海がお好きですか」「ここは故郷の海に似ているんだ。能登の根っここのところなんだがね」「どんなところが似ているんですか」「そうだね。伊豆の岬が涯しなく海のなかにのびてゆく。ちょうど能登の岬のようなんだ」「トーマス・マンもリュベックの故郷の海を書いています、ミュンヘンに移るまでの少年や青年期の北海を。とてもいいですね。ヘルダーリンやユーゴーの地中海とは全く違って、身にじかに浸みってくる黄昏の海なんです。先生！是非青少年の能登の日本海と晩年の相模の海を書いて下さい。先生の海の歌と随筆」「君はそんなに海が好きかね」「ええ、僕は海で成長してきたんです。そしてどの海も泳ぎたいですね。ソルボンヌにゆくより地中海で泳ぎたいですね。僕は小学校の六年の夏休み中、土佐の浦戸の外海で、岩板の上に打寄せてくるうねりに揉まれた豪快さは今も僕を緊張させます」「土佐の海はそんなに素晴らしいかね」「相模もいいですが、全然ちがいます。ここは南端の石廊崎まで出なければ、何かに護られているような、崎や島や丘の縁に囲まれた温い優しさがありますが、いや石廊崎だって霊峰に見護られて伊豆七島を目前にしていますが、土佐の海は全く違います。何もないんです。ただ無限のうねりがあるだけです。本当にいのちの純粹な旋律だけです。先生はいらしたことございませんか」「いや、どこも知らないよ。海といえば能登と鹿児島と、この稲村ヶ崎ぐらいのもんだな。鹿児島といたって、天野貞祐につれていかれたただけでね。天野が七高の教師をしていた時にね。本当に海を見たのは驛故郷の日本海と、ここだけだ。君は方々の海を見てきたんだから、君こそ海を書けばよい」「いや、僕の海は相模と駿河と土佐と安芸と播磨ぐらいのもんです。これからです。太平洋と大西洋のいたるところで……」「それじゃ腰が曲ってしまうぞ。それから書くんじゃ。いや、それでもいいさ。君は元気で

旅行が好きだから、足腰が立たなくなってからじゃないと、書けないだろう」「ええ、僕もそう思っています。」もう陽が傾いてきたので、いとまを告げると先生は「ちょうどいい。夕方の散歩の時間だから海を歩こう」と、下駄履きで籐のステッキをもって狭い野道をゆく先生の後姿はまだしっかりしたものだ。それでも僕からみれば、三十五歳も年長の大先生である。おそろおそろお伴をする。とは言っても幾多郎には勝手なことを言える温く広い懐があった。田辺元さん〔(1885-1962)〕ではそうはいかない。去年の夏だった。鎌倉の材木座の先生の父君のお宅の二階で、夏休暇をすごしておられる時だった。お訪ねすると、いきなり「あなただったらゲーテの側にお立ちでしょうが」と、まるで先輩にでもものを言われるような口調だ。僕は呆気にとられて先生のシラーの芸術道徳論を神妙に拝聴する。冗談なぞ暢気にも言えるもんじゃない。そこへゆくと西田さんには何でもいえる。海であろうが山であろうが、女であろうが男であろうが、森羅万象映るがままに吐露することができる。／ただ哲学に関しては僕は何一つ話したことはなかったが、哲学者の人間的風景に関してはよく喋った。先生の反応の仕方が面白かった。気に入らぬと黙して自分の鼻を摩する。それは拒絶反応なのである。先生の鼻は高いというより長く太く、高く伸びた額頭を支える大黒柱のように力強い。小軀の割に手には把握力が漲っている。特に指が逞しい。ゲーテはよく自分の手を誇らしげに語っているが、先生は自分の右手の中指の肉刺を見せて、ペンを握りしめてきた数十年を、その凝縮した力点に語らせようとしたのであろう。僕があまり海の話ばかりに打興ずるものだから、「世界を泳ぎ廻るもいいが、世界を書かなくちゃ」と揶揄われた。その揶揄のなかに、跳ねかえってくる先生の日毎の行事を受取って恐縮した。先生には書くことと考えることは同じ行事である。世界を考えることは世界を生きることである。先生にとっては世界を生きること世界を書くことである。そして世界を書くことは世界を創ることもある。それはちょうど農夫にとって耕すことである。それはまさに日毎の行事である。「先生は毎日お書きになられるのですか」「そうだよ、毎日書くよ」といって僕に指の肉刺をみせられた。その骨太い指は僕のなかに、意味ありげにどっかと蟠踞してしまった。

そのころ、西田幾多郎先生は京都大学をお辞めになってかなり経っておりまして、鎌倉の姥ヶ谷に住んでいらっしゃいました。ある日、呉先生が西田先生のところへつれて行ってくださるというのです。呉先生が辻堂ですから、話が前後しますが家の焼け落ちる

直前の五月二十二日、北鎌倉で呉先生と落ち合い、そのあたりを散歩したあと鎌倉まで行き、江ノ電で稲村ヶ崎で降りました。ちょっと歩いて姥ヶ谷に向かい、西田先生の小さなお住まいの門が近づいた時に呉先生は、「あなたは私の親戚の子ということにしますから、そうしてください」とおっしゃる。「どうしてでしょうか」と伺うと、「このごろ、憲兵や特高が先生の身边を警戒しています。親しく訪ねている私なら問題ないから」ということでした。私はしばらく外に待たされました。警察官がそこにいます。やがて、私は招じ入れられました。／西田先生は黒い和服をお召しになって、藤の椅子に坐っておられました。ちょうどその日、呉先生が献呈された『ギリシア・ローマ古詩抄』のページをめくりながら、西田先生は呉先生とお話なさっていらしたんです。そのころ出ていた『現代哲学辞典』という本に西田先生の顔写真が出ていたのとやはり似ていて、とにかく鋭い目です。本物は写真以上に鋭い目つきなんだと思いました。七十五歳とうかがっていたのですが、非常に若々しかった。／西田先生と呉先生のお話に、こういうことがありました。西田先生は「この戦争は勝っても負けても構わない。日本人はなんとかアジャストしていけると思う。東洋民族の中では、日本人はそういう意味で力のある民族だ。ただ、戦争をすれば勝つに決まっていたとしたその誤りが、いまになって出てきたんだろう」。ここで先生が「心理を論理に変えてしまうのはよくない」とおっしゃったんですね。それがのちに敗戦をめぐっての人びとの動揺について、心理的の一貫性とか論理的な一貫性という言葉が自分が使えた原因です。／「特攻隊の方法は準備不足というほかはないが、とくにこれは人間と物質とを同一に考えることなのだから、非常に不真面目な考えである」。それから、「ドイツは必ず復興するだろう。しかしその復興はヒトラーのようなやり方ではない」。その次が非常に西田的だったのですが、「ヒトラーもムッソリーニも日本も間違っている。どうしてかという、アナクロニズムだからだ。なぜか。それは、時代はいま国家が自己を否定して、世界の場となる時代なのだ。それが、逆に国家を主張しているんだから論理に合わないんだ」。そして「自分が他の点では非常に尊敬している小泉信三君〔(1888-1966)〕も戦争が始まった以上、押し進めるほかはないと言う。自々はそこが分からない。日本はこの二十世紀になってはじめて世界に出てきたといってもいいのに、態度が不遜だから日本人にはまだ国家が自己を否定するという意味が分からない。だから、国家の主張だけをしている」「ロシアの動きは注目すべきだ。これからの時代の要求に適っているので、ある意味で世界を作らうだろう。しかし、人間はあるところまでしかそれについていけない」。いま考えると、本

当に予言的などころがあります。あのこと英独日仏伊が五大強国でロシアは入っていないし、いまソ連はなくなったし。／それから、「アジアはアメリカとロシアが支配するだろうが、やがて意外なことが起こるに違いない。そういう国々では支配できないものがアジアにある。しかし、その国はどこか私には分からん」。戦後すぐインドが第三勢力として大きくなったり、中国が強くなったりしましたから、当時の日本人としては「意外」と言うほかはないでしょう。／「こういう時に哲学はいよいよ大事になってくる」。間を置いて、「哲学者はユダヤの預言者のように、しかも根拠を持って予言しなければならない」。そこまでは呉先生とのお話ですが、呉先生が手短に「私の親戚の子です」と言って、「この子は哲学を勉強していて、特別受業学生としてギリシア哲学を出隆さん〔(1892-1980)〕のもとで勉強しています」と言うと、西田先生が今度は私のほうをお向きになって、そこから先は私にお話しになってくださった。問答というよりも先生がずっとお話しになったんです。「アリストテレスの『形而上学』を読むんなら、どんなに能率が悪くても、今している通りに原典で読みなさい。私は京都大学にもいずれそういうものを使う人もあろうと思って、ギリシア語のスコリア(注釈集)を全部買っておいた。広島にいる高田三郎君(のちに京大教授(1902-1994))などがよくやっているが、一体に日本の学者は古典をやりたがらない。それがスケールを小さくする。だから、今の通りに古典の勉強を続けなさい」。／それから、「アリストテレスの論理学——『ローギイク』と先生はドイツ語でおっしゃいました——は形式的ではないことに注意すべきだ。彼の考えでは存在と論理とが一致している」。また「中世では存在は人格として深まったが、論理はそのままだったから、どうしても論理というと形式論理に考えられていく。それではいけない」とか、「カントの論理は、ニュートンの自然科学の論理にすぎない。だから、もう少し論理を深めなければいけない。自分はそのことを少しはやっているつもりだ。それから、中世で本当の意味の大哲学者はアウグスティヌス。あそこには、時間性も、従って歴史性も意志の自由の問題もみんな入っている。尊敬しなければならん哲学者を一人挙げろといったら、私はプラトンとアリストテレスとアウグスティヌスとを挙げる」。／それから、「私が『働くものから見るものへ』を書いた前後、非常に思索の苦しい時代があった。だれもあまりそのことを言わないけれども、自分が無の考えを本当に深めたのは、アリストテレスが『実体は、主語となって述語とならないものだ』というふうに定義していたのをひっくり返して、『述語となって主語とならないものが無である』と考えたのだ」ということをはっきりおっしゃって、「だから、君のように

じめから大物を読もうとしているのはいい。読むことは影響を受けることだから、できるだけ大物を読んで、もう馬鹿なものは読むな。問題はどこまでも考え抜いて、図式に当てはめないことが大切だ。体系は考えているうちに自然とできるもので、どんな時代でもこうして君のように哲学を勉強しようという人がいるんだから、真理は人類の中に見えてくるのだ。／私はその時間がどのぐらいだったか覚えてないんです。長かったとも短かったとも思えるのですが、呉先生に促されてお暇乞いをしました。嬉しかったのは、西田先生が「きょうははなはだ気持ちが良かった。またぜひ来たまえ」とおっしゃってくださったことです。それが耳に残って、今でも忘れられないし、それから「いいかね。君、哲学者は予言者にならなきやならない。根拠を持った予言者になりなさい」ともう一度言ってくださったのが、本当にもったいないような励ましの言葉でした。／それからすぐあと、六月七日に西田先生はお亡くなりになりました。雨の日でした。

注

- ¹ 布川角左衛門「西田先生の思い出」『西田幾多郎——同時代の記録』下村寅太郎編、岩波書店、1971年、326-331頁。〔 〕内は本稿筆者による。
- ² 『田中美知太郎全集』第13巻（『時代と私』）、筑摩書房、320頁。西田の疎開については318頁以下を参照した。
- ³ 竹田篤司『物語「京都学派」』中央公論新社（中公文庫版）、2012年、237頁以下。出生については、同著者による評伝が委曲を尽くしている。『西田幾多郎』、中央公論社、1979年。
- ⁴ 旧版『西田幾多郎全集』、第12巻、1975年、265-266頁。この版からの引用については、以下、「旧第18巻、256頁」のように略記する。
- ⁵ 藤田正勝『人間・西田幾多郎』岩波書店、2020年、349頁。
- ⁶ 「昏睡」とは、今日では無覚醒・無反応（unarousable unresponsiveness）で定義づけられる状態である（Stupor and coma in adults. UpToDate Inc. <http://www.uptodate.com> (Accessed on November 20, 2023.))。
- ⁷ 上田久『続 祖父西田幾多郎』南窓社、1983年、282頁。
- ⁸ 東京帝大哲学科出身。三木清の法政大での同僚で、科学論、デカルトやカントの翻訳などを残している。
- ⁹ 西田家の「前隣」に、画家の有島生馬（1882-1974）の邸宅があり（西田の日記にも登場す

る)、同じ姥ヶ谷の住人で有島の弟の作家里見淳(1888-1983)なども佐藤の記録のなかに現れる。

- ¹⁰ 高坂の記す日付は以下に見るように正確ではない。本稿で引用する箇所の直前に、西田は「私の論理について」を書き始めた 30 日の午後に倒れた、と高坂は記している。高坂、前掲書、231 頁。そこで、本稿では、高坂の記述を他の資料の日時に可能な限り揃えた。
- ¹¹ 筆跡を見慣れていた木村からみれば、微妙な違いがあったわけである。現在では、石川県西田幾多郎記念哲学館の収藏品データベースより閲覧できる。
<https://jmaps.ne.jp/nishida/index.html> 島谷俊三(生没年不詳)によれば、木村は病床の西田に代わって代筆していたらしい。西田からみて、木村の筆跡は自分のものに似ていると考えていたようである。註 19 の島谷「晩年の西田幾多郎先生」にその報告がある。
- ¹² 木村、『花と死と運命』262 頁。
- ¹³ Annars Lerdal et al., Physical impairment, depressive symptoms and pre-stroke fatigue are related to fatigue in the acute phase after stroke, In; *Disabil Rehabil.*, 33(4), 2011, pp.334-42.
- ¹⁴ Overview of the management of chronic kidney disease in adults. UpToDate Inc.
<http://www.uptodate.com> (Accessed on November 20, 2023.)
- ¹⁵ クッシング症候群は、副腎からコルチゾールが過剰に分泌される病態である。特徴的な身体所見として、赤ら顔、満月様顔貌、野牛肩、中心性肥満、腹部の赤色皮膚線条などを呈することが知られている。
- ¹⁶ 褐色細胞腫は副腎髄質あるいは副腎外の傍神経節に生じる腫瘍で、カテコラミンを過剰分泌し頭痛・動悸・高血圧などの症状を呈する。
- ¹⁷ Güliz İkizoğlu, Red face revisited: Flushing, In; *Clin Dermatol.*, 32(6), 2014, pp.800-8.
- ¹⁸ 和辻照『和辻哲郎とともに』新潮社、1966 年、388 頁。なお、琴は 5 月初旬に西田が「自分はまだ身体も健全であるし頭脳も決して衰えたとは思わないから、これからまだ沢山考えて書くつもりである」と話したと記録している。旧第 12 巻、273 頁。
- ¹⁹ 小島のこの書物は自費出版の稀覯本であるため、紹介の意味も含めてここに長く引用する。
『百年目にあけた玉手箱』第 1 巻、創樹社、1995 年、331-335 頁。この書物とその特性については、竹田の報告に詳しい。竹田、前掲書、115 頁以下。小島は西田からの通信を得た、と記しているが、新版全集にも小島宛書簡がそもそも一通も収録されていない。西田邸を訪問した日付については、小島の証言と西田の日記から推定した。新版『西田幾多郎全集』第 18 巻、岩波書店、2005 年、216 頁(以下、同全集からの引用は、「新 18 巻、216 頁」の

ように略記する。)。小島に対する西田の評価は、柳田謙十郎(1893-1983)宛1938年7月27日付書簡を参照。新第22巻、157-158頁。鎌倉の西田邸訪問記は他にも多く残されている。最後の哲学関連の対話の機会を持ち得た訪問者としては、松本正夫(1910-1998)が自分ではないか、として報告している。松本正夫「西田先生との最後の出会い」『西田幾多郎—同時代の記録』、226-230頁。若き今道の訪れる4日前の5月18日のことであった。呉と今道の訪問については、西田自身の日記に、22日「呉茂一と東大哲学生来訪」とあるので、今道の証言と一致する。西田最晩年の執筆とその出版(とりわけ終戦後に出版された『哲学論文集 第六』に収められることになる「生命」「場所的論理と宗教的世界観」)の具体的な記録は、註1の布川の文章の他に、以下がある。島谷俊三「晩年の西田幾多郎先生」「続晩年の西田幾多郎先生」『西田寸心先生片影』高山岩男・島谷俊三編、黎明書房、1949年、48-59頁、60-79頁。田中美知太郎、前掲書、320-323頁。

- ²⁰ 今道友信『知の光を求めて』中央公論新社、2000年、48-52頁。この証言も、他であまり参照されていないように思われるので、小見出しのある節「西田幾多郎を鎌倉に訪ねる」のほぼ全てを引用しておく。今道のここでの記述は、若き日の記憶と日記に基づいたものである。日記そのものの一部は、『断章——空気への手紙』(TBSブリタニカ、1983年、69-76頁。)のなかで紹介している。田辺に対する批評もあったが、それを記録した数行は公表しなかった。西田の発言の異同はここでは問わない。なお、今道が西田の口から直接聞いた「哲学者は予言者にならなきゃならない。根拠を持った予言者になりなさい」という言葉は、ほぼそのまま、『哲学論文集 第二』(1937年刊、雑誌『思想』1936年9月初出)収録の論文「論理と生命」のなかに出てくるものである。「我々が歴史的身体的自己として行為的に直観する所に、ロゴス的に世界観というものが成立するのである。行為的に直観せないかぎり、世界観というものはない。故に如何なる人も生きるかぎり、一種の世界観を有って居るのである。如何なる人も哲学者である。人間は歴史的身体的なるが故に、形而上学的動物であるのである。真の哲学者は一種の予言者でなければならない。プロフェットという語は固未来を予言するものではなくして、「語る者」という意義であつたろうと云われる。神に代ってその意志をイスラエルに語る者、即ち「神の口」というべきものが、予言者であった。哲学者は歴史の使命を語る者でなければならない。」旧第8巻、364-365頁。45年4月10日には高坂にVolzの書と共に、長年親しんだBosanquetの書物も鎌倉に送るよう頼んでいる(新版全集の静子宛日付不明書簡にも同様の記載がある。)。新第23巻、370、401頁。